

北海道では3月に入ってから、再びインフルエンザの流行が見られています。今シーズンのA型インフルエンザに罹患していない人(子どもと大人)は相変わらずA型に感染し3月から流行する春のインフルエンザと言われるB型のインフルエンザが4割くらいにAとBが入り混じって流行している状況です。

昨年11月のインフルエンザの最初の発生時期に北海道の民放テレビに取材されました。インフルエンザやその他の“移る”病気、正しくは“感染症”と言いますが、その原因は大きく分類して治療に抗生物質が必要な細菌による細菌感染症と、インフルエンザと水痘(水ぼうそう)・ヘルペスウイルス以外には治療薬のないウイルス感染症に大別されます。

人から人へ“うつる病気”(動物や汚染物質や水からもありますが)  
は細菌かウイルスが感染することによっておこる。

これが医学の基礎知識、感染症の理解のスタートとなります。

この基本があまりにも皆さんに知られていない事に20年以上前に気づいた時、私は大げさではなく愕然とした思いがしました。

学校でこのような医学と病気の基本をまったく教えていない。

と、言うか、学校の先生自身も知らないのではないか、文部科学省の教

育課程の中に医学の基礎教育が入っていないのでしょうか。

しかしこれは日本国と日本国民とその健康と医療にとって多大な損害なのではないでしょうか。

ところで、細菌感染症には抗生物質治療が必須です。ウイルスには抗生物質は無効です。これも基本中の基本です。

これを知らなくては感染症の治療の意味がわかりません。

でも話はこれからです。“かぜ”という言葉がありますね。本当はカゼという病気はない、というか一つの病気を指すものでもなく、まあ、感染症、うつる病気を漠然と“かぜ”と総称しているのだろうとでも考えておいてください。

逆に言うとこれほど曖昧で非科学的非医学的な言葉はありません。医学書にも記載はされていますが“カゼ症候群”となっていて原因は色々な病原体による感染症ですがのどの痛みや咳や鼻みずなどの比較的軽い感染症で原因も特定出来ず自然になおった病気の総称に過ぎません。主にウイルスの感染が原因として多いのですが、皆さんよくご存じの溶連菌感染症ものどが痛く、進めばのどが化膿したり熱も出たり3割くらいの人で発疹が出ます(昔で言うしょう紅熱です)。

さあ、ここからが重要です、溶連菌感染症などの細菌感染症も最初は検

査でもしない限り“カゼ”という判断になってしまいがちです。

まあ、カゼの原因は殆どがわからない。それが現実なのです。

カゼの原因はわからない。誰もその場で原因を確かめた人はいないので  
す。

で、“かぜ”には抗生物質は要らない、不要である、乱用である。かぜに抗  
生物質を使うバカな医者。これは何十年もまえの TV ドラマでのセリフで  
す。それを書いたのはさぞ偉いシナリオライターなんでしょう。

ここからまたまた重要です。**カゼ扱いされた患者さんが実は溶連菌感染  
だった。**これは頻繁にみられる事です。溶連菌感染が進むと全身に毒素  
が回る丹毒(実はここまで悪化した人をみたことはありませんが)、あとに  
なってリウマチ熱、腎炎、心内膜炎、心臓弁膜症などの病気になってしま  
うことがあります。腎臓を悪くしたり、心臓を悪くして腎不全、心不全のよう  
な一生の病気を抱えたり、心内膜の溶連菌感染で亡くなった大人も知っ  
ています。

“カゼ”には抗生物質は要らないなどと言っていることがいかに危険なこと  
かおわかりいただけたでしょうか。カゼなどと言う“病名”は何の根拠に基  
づいた診断でもありません。何の根拠もない病名で必要な治療が決まる  
はずがないのです。咳のしつこい病気にはマイコプラズマや肺炎クラミジ

ア、百日咳があります。ウイルスの感染症にはインフルエンザ以外有効な治療はありませんから仕方ないとしても上に上げた呼吸器感染症は初期には診断の検査があっても陽性にならないので、これもまた“カゼ”として扱われているあいだに症状が悪化して行き。高熱を出して激しい咳とともに肺炎になるのであればまだわかりやすいのですが、熱は出ないものの咳が1か月も2か月も続く人が近年とくに多いのです。

この呼吸器感染症は普段使われる抗生物質は効かずマクロライド系やオゼックス(マイコプラズマ)、メイアクト(百日咳)など限られたものしか効きません。このうちマクロライド系抗生物質は、これら3種類の病原体にいずれも効果があったのですが、最近では特にマイコプラズマに効果が落ちて効かなくなって来ています。いわゆる**耐性菌**です。抗生物質で死滅していた細菌が生存のためその抗生物質にやられないように進化し無効にする能力を身に着けるのです。抗生物質がたくさん使われ耐性菌が増える。と巷間言われています。避けられないことでもありますから、必要な時に最小限、最短で感染症をしっかりと治す抗生物質の使用法が重要です。

どのような方法が良いのか、それが個々のドクターのノウハウなのです。もちろん私のノウハウ、治療の考え方があるのです。